

教職員のおすすめ図書

SEASON 2
Vol.02

人を幸せにするには、
まず自分が幸せになら
ないといけない。



理 科
教学企画部

守口 佳孝

『幸福論』

岩波文庫
アラン 著 神谷 幹夫 訳

どんな学生・生徒時代でしたか？その時の思い出も合わせてお聞かせください。

高校や大学時代は、周りの友だちが青春を謳歌している中、僕はチェック柄のシャツを着て、教室の隅で一人勉強をしているような人でしたね。それもあって、大学では物理に熱中していた学生で、恋愛とかはまったくの無縁な学生でした。だけど、もともとは国語が好きだったんですよ。言葉遊びとかが好きで。大学1年の頃は新入生で周りが早々にカップルになっていく中、僕は大学の教授と都々逸（どどいつ）にハマっていました。「恋に焦がれて鳴く蝉よりも 鳴かぬ蟬が身を焦がす」とか唄ってましたよ。昔の人って言葉遊びが好きですよね。今風に例えるとラップとかなんでしょうね。今から考えると、ちょっと変わった人。いいように例えると独創的でオリジナリティに溢れた人でした。



— 今回先生が取り上げられた本は「幸福論」。軽く内容を教えていただけますか？

この本はフランスの哲学者であるアランが1925年に発表した書籍です。幸福になる方法がバーツと書かれてあって、だけど、いわゆる啓発本にありがちな「〇〇をしなさい」とか「こういうリストを作りなさい」とか、そんなのではありません。普段の人の日常とかを切り取ってきて、これってやっぱ大事だよねって。実生活と自分の考え方を取り混ぜながら書いている本です。1冊が1つのストーリーで展開していくわけではなく、1つの話が2～3ページで完結しています。

教員という職業は生徒たちを未来に導く

——この本を読まれたきっかけは？



仕事でもあると考えます。いかに彼らに幸せな人生を送つてもらおうかって考えた時に、ちょっと宗教チックかもしれないんですが「幸福とは何か」というのを自分自身、ちゃんと考えないといけないな、と思つようになりました。で、昔の本ではあるんですけど、結構有名なこの本を手に取つたんです。この本はどうやらかといえば難しい内容なので、一回読んだだけではなかなか理解できないところもあって。幸福って何かって考えて、僕にどつて楽しむことが、きっとみんなにとても楽しげなことだあらわい。そしたら何を手助けすればいいんだろう。多分、今読んで感じたことと、もつと人生をすすめてから読んで感じることが違うんだろうなあとか。読みながらといふ感じにいろいろなことを想像させてくれる本です。

——この本を読んで「い、分かる！」みたいな共感する部分つてありましたか？

旅行が好きでよく出かけるんですけど、帰つてきたらグターッて疲れることがあるんです。これって「僕は好きで旅行をしてるのに、不幸になつているじゃん」って思つたんですね。で、「幸福論」にはそれに合致するような話が掲載されています。「短期間にたくさん見たいからじろじろ名勝地などを巡るけど、それって疲れるよね」みたいな内容が書いてあって。「あ、これこれ！」って僕は二ンマリ。100年も前の人々の話に共感したんですね。僕だけじゃないんだつて安心感があつて。そしてさつきの文章はこう続くんですよ。「僕の好きな旅というのを一度に一メートル

とか2メートルしか進まないような旅である」。あちこち詰め込んで忙しく移動する旅もじけじ、あまり欲張らず一つのところに時間を過ごすのも、また違つ側面が見えていいんじゃないかな。僕たちの世界で置き換えると、例えば大阪に住む僕らがたまに近くの京都のカフェとかにひつて、聞こえてくる会話の中で、同じ関西でも少し違う京言葉に新鮮味を感じたり。こんな風に、この本にはやつて生活の中で幸せを感じるヒントが書いてあります。

——読書をすることでたまにそういう出会いってありますよね。世の中に自分と同じものを不思議と思っている人がいたり、それに対する答えを知ることができたり。



——この本は難しい本とおっしゃっていましたね。先生は、難しい本に対してどのように取り組まれていますか？難しい本にチャレンジする生徒にアドバイスはありますか？

僕は、難しかった、理解しづらかった箇所を人と話してみるようにしています。ただ、話したら本に関係なくなつたりもするんですが、自分たちの経験の



話にどんどん繋がっていくたりして。話の脱線もまた良じとと思うんです。「ミニケーションの中で、自分では思いつかない考え方を知れたり、読破するマインドであつたり、理解するヒントを得ることができますし。これも読書の醍醐味じゃないかなと思っています。

——最後に生徒のみんなにメッセージを。

この『幸福論』以外にも、この学校はとても本が読みやすい環境があるので、ぜひ休み時間とかに実際に本を手に取ってみてください。文庫本だと表紙に書かれている文章だけでもいいので、目を通してもらうと、何か自分の琴線に触れるワードがあるかもしされません。それをきっかけに、もしかすると自分の人生を変えるような一冊に巡り合うかもしれません。中学・高校の6年間って本当に一瞬で、そして結構特殊な環境だと思うんです。例えば自分から求めに行かなくても、周りにいろいろあるし、恩恵を享受できます。また、クラスメートたち、毎日同じ人と顔を合わせるっていうのも、高校が最後だと思うんです。その中で人間について深く知れるってのも、この時期ならではだと思います。社会人になると人間関係も希薄になりがちですからね。だからこそいろんなことにチャレンジしてほしいし、この『幸福論』も高校時代に読んでおいて、今のうちにいろんな考え方があることを知つておいたら、社会に出た時にきっと役立つと思います。自分の許容量が大きくなるというのか。もしかするとライラフあることも減るかもしません。

——本を読んでイラマを減らそうって感じですね。

はい（笑）。本を読んでイラマをなくして、豊かな人生を送ろうって感じですかね。これから先の人生に向けての「ミニケーションの練習として本が役に立つよって。

インタビュー

大阪国際中学校高等学校 図書館司書
株式会社 紀伊國屋書店 角井 貴乃